

<星の信仰—太陽信仰の本質>

天照大神は言うまでもなく太陽神的性質だが、本来は道教で北極星を意味する“太一”が神宮を象徴する言葉として使われ、外宮と内宮の両方にツキヨミ（月夜見、月読）の宮がある。元伊勢・籠神社の秘伝に依ると、外宮で祀られる豊受大神は太陽神的な天照大神に対して月神的とも言われている。

対して仏教系では、法隆寺（若草伽藍）などは聖方位と言われる冬至の真夜中にシリウスが輝く方位（真北から西に20度傾いた方位ライン）を軸としていとも言われ、鞍馬寺で5月の満月の夜に行われるウエサク祭で歌われる歌には、シリウスが登場する。また、空海は修行中に金星を飲み込んだという伝説もある。

かつて神仏は習合されていたから、神道と仏教は表裏一体とも言え、神道で隠されていることが仏教では表に出ているという解釈も可能である。（その逆もまた然り。）

日本に於いてとかく注目されるのは太陽だが、このように太陽信仰の裏には隠された星の信仰があるように思われる。その秘密を探ってみよう。

(1) 聖方位

聖方位とは、北半球で冬至の真夜中にシリウスが輝く方位（真北から西に20度傾いた方位ライン）である。ペルシャのペルセポリスやバビロニアのバビロン、ローマのポンペイ、支那の西安（古代ペルシャに近い位置）、日本の斑鳩などはこの聖方位を軸としている都市で、シュメールのジグラット、バビロニアのバビロン神殿、日本の法隆寺（若草伽藍）などは聖方位を軸としている建築である。

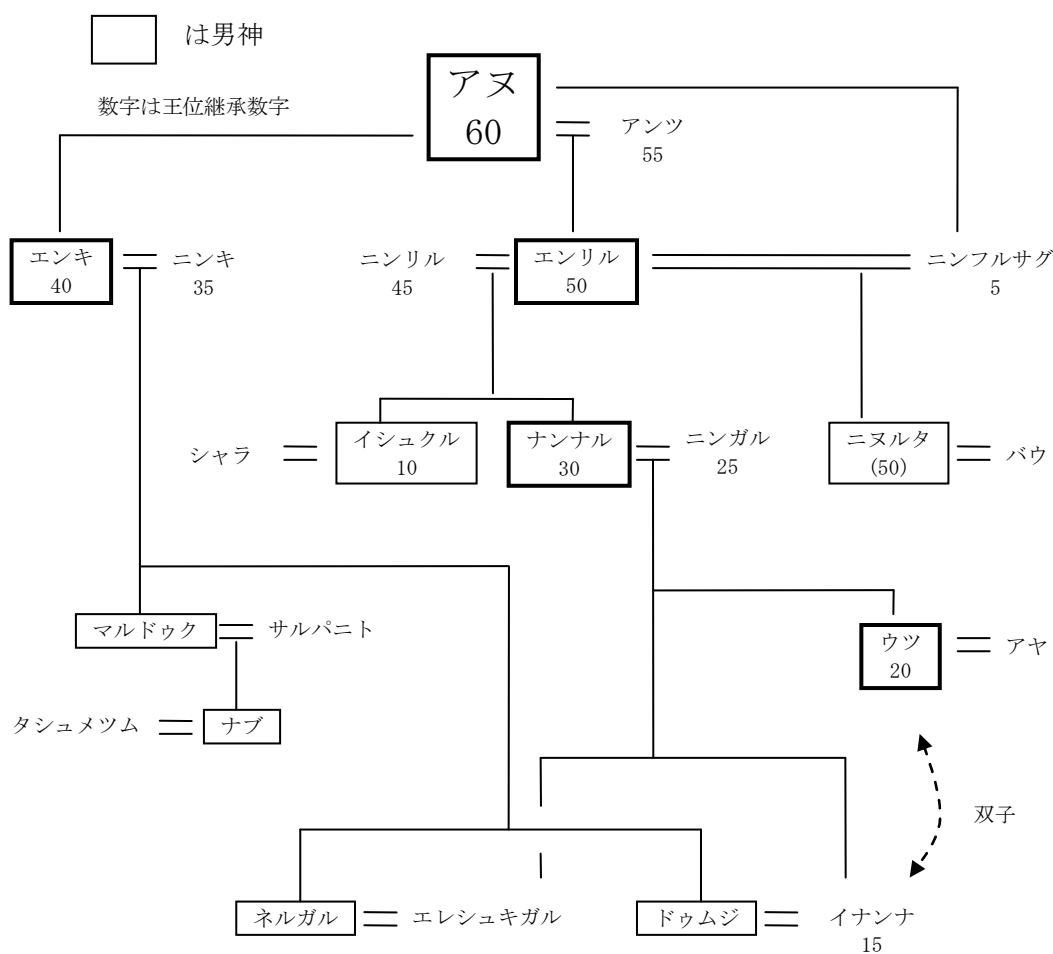
<http://blog.goo.ne.jp/gemi2011/e/a39f423a4c499a44661f65994941a74b>

<http://nami-no-kai.blog.so-net.ne.jp/2015-07-22>

ここにシュメールが登場するが、ならば、神々として振る舞ったアヌンナキはシリウスに何らかの意味を見出し、それを暗示していると考えられる。特に、法隆寺はペルシャ系秦氏が建築に関わったとも言われ（関わった大工の名前がペルシャ語で理解できるという）、ペルシャの最高神は豊穰の女神で不老不死思想の根源、イナンナである。また、地球の主エンキの息子でアヌンナキ最高の科学者ニンギシュジッタが造ったピラミッドのあるエジプトはエンキの領地でもあるが、シリウスが日の出と同時に東の地平線から昇って来る時期が（夏至頃＝太陽活動の最盛期）、ナイル川の氾濫時期と重なることを知っていた。その

周期は約 365 日で、太陽暦の基となっていることからしても、太陽とシリウス
 の間に偶然とは言えない何かがあるのだろう。それはまた、太陽を除く恒星の
 中で、シリウスが全天で最も明るく輝く恒星であることも同様である。

偶然にも、ナイルの氾濫はシリウスによって知らされ、偶然にも、シリウス
 暦は太陽暦の基となり、偶然にも、太陽が復活するとされる冬至の真夜中にシ
 リウスが輝く方向に向けて都市や神殿などが建設されたのである。言い換えれ
 ば、地球とシリウス、太陽の位置関係は、そのような方位関係にある。これを、
 “偶然”の一言で片づけてしまうのは簡単だが、宇宙は意識体であり、星々も
 その一部であるならば、“宇宙の意志の意図的な配置”がシリウスと太陽、地球
 の位置関係をこのようにさせたとも言えるのである。では、まずシリウスから
 考察しよう。



(2) シリウスの意味

シリウスには“焼き焦がすもの”“光り輝くもの”という 2 つの意味がある。“焼き焦がすもの”は古代シュメールやインドの核戦争を思わせ、“光り輝くもの”と同義には“ルシファー”“イルミナティ”がある。

ルシファーとイエスは聖書に於いて共に“輝く明けの明星”とされ、その原型はイナンナである。イナンナは性エネルギーに関わるシステムを人類に教えた。それは主に、イナンナが主神だったインダス文明に於いてだが、それには黒魔術的側面もある。性エネルギーは蛇のエネルギー・クンダリーニであり、宇宙創造のエネルギーである。創造という点では“光り輝くもの”だが、使い方を誤れば堕ちていく“焼き焦がすもの”であり、シリウスそのものである。そして、イナンナはシヴァ神の原型であり、まさしく破壊と創造の神である。

(3) ドゴン族の伝承とシリウス

現代天文学が発展する以前から、シリウスに関わる驚異的な伝承を継承している部族がアフリカに居る。西アフリカのマリ共和国に住むドゴン族である。

<http://www2.odn.ne.jp/~cic04500/atlan09.html>

<http://blog.livedoor.jp/hardthink/archives/51870791.html>

彼らの宇宙創世神話では、中心にシリウスが位置しており、かつてシリウスからやって来た水の主ノンモが人類の祖となり、まだ未開だった人類に様々な知識を授けて帰って行ったという。これは、半神半魚の神オアンネスが人類に叡智を授けて海に帰って行ったという古代メソポタミアに於けるオアンネス神話と同じである。オアンネスは半神半人のアダパとも言われているが、地球に最初に上陸したアヌンナキの王子エンキであり、エンキがアダパの父でもある。そして、エンキのシンボルは魚、亀、蛇、水（海）、水瓶で、水瓶は洗礼のシンボルであり、オアンネスはイエスに洗礼を施したヨハネ（イエスの弟子のヨハネも）の語源でもある。エンキは地球の主であり、占星学に於ける地球のシンボルは“丸に十”で、エンキを暗示する。



彼らは主星シリウス A を「シギ・トロ（シギの星）」「ヤシギ・トロ」と呼び、

60年毎に行われる祖霊を祀るシギの祭礼の儀式と深く関係している。60は神々アヌンナキの星ニビルに於ける王位継承数字の最高数字であり、大神アヌを象徴する数字で、ニビルとの深い関係を思わせる。

しかし、シリウスAを焦点にして50年周期で楕円軌道を描いて回るシリウスBを、彼らは宇宙の中心に置いている。この星が宇宙に於けるあらゆる創造の出発点だという。ドゴン族はこの星を「ディジタリア」又は「ポ・トロ（小さな星）」と呼んでいる。ディジタリアは天空の中で最も小さい星だが、最も重い星だという。サガラという、地球上のすべての生物が集まっても持ち上げられない重い物質でできており、地上のすべての鉄に匹敵する重さの物質だという。ここまでは最新の天文学でようやく確認されており、シリウスBの正確な公転周期は49.8年で、ドゴン族の伝承とはたった0.2年の誤差である。そして、50という数字は、風の神で地球の総督エンリルの数字である。

また、シリウスBは白色矮星で、1立方センチ当たり1トンという極めて重い金属性物質で構成されていることも判明しており、ドゴン族のシリウスに対する情報は極めて正確である。

更に、彼らはシリウス星系には第3の星「エンメ・ヤ（女のモロコシの星）」が存在するという。この星はまだ未発見だが、シリウスCと呼ぼう。シリウスCはシリウスBの4分の1の重さであり、地球にとっての太陽のようなもので、シリウスBよりも4倍明るく、大きな楕円軌道を描いてシリウスAの周りを回っている。しかも、シリウスBとシリウスCの半径間の角度は常に90度で、シリウスBとCは、同一周期で同じ方向に回っているという。更に、シリウスCは「ニャン・トロ（女の星）」という惑星を伴っており、このニャン・トロがノンモの故郷であるという。これをシリウスDと呼ぼう。

ならば、ノンモ＝エンキの故郷ニャン・トロ＝シリウスDこそ神々の星ニビルに他ならない。それが、宇宙的な変動によって太陽系に突入する軌道に変化し、異常とも言える3,600年の長周期軌道を取り、シリウス系と太陽系を直接結ぶ役割となったのであろう。あるいは、映画スターウォーズに登場するデス・スターのような宇宙要塞に改造されたのかもしれない。

ドゴン族の伝承に依れば、ノンモは再び戻って来るといふ。その再来の日は“魚の日”と呼ばれ、再来の前兆は“新しい星の出現”、すなわち“10番目の月の星”の再出現であるという。そして、“10番目の月の星”の内部から、ノンモが箱船で地球に降り立つという。

ニビルもまた10番目の惑星と言われており（冥王星を除き、月を含めた数え方で、冥王星は元々土星の衛星ガガ）、魚はエンキのシンボルだから、ノンモの

故郷とはシリウス D=ニビルである。

そして、ドゴン族はアフリカだが、大洪水前のアフリカはエンキの遺伝子実験場で、大洪水後にエンキはアフリカを開拓（干拓）した開拓者＝プタハであり、ノンモの性質そのものである。

また、日本の最高神は“ヤー”と言い、イナンナがその一柱である。ならば、エンメ・ヤ=女のモロコシの“女”とはイナンナのことであり、ニャン・トロ=女の星とは“イナンナの星=ニビル”と言える。（ヤシギ・トロにも“ヤ”が含まれる。）すなわち、シリウス系にはエンキとイナンナが重ねられている。

(4) 鞍馬の魔王尊の歌

鞍馬寺では魔王尊を祀り、5月の満月の夜に行われるインド由来のウエサク祭で歌われる「魔王尊にささげる歌」にはシリウスや金星が登場する。これは官長が神智学に凝り、導入したとも言われているが、その歌の内容を見てみよう。（一部、解りやすいように原語の平仮名から漢字に変換。）

我らの御父（おんちち）魔王尊 マントラ唱えて皆を呼び 一心こめて大前におろがむものをみそなわせ

我らの御父魔王尊 天地の秘密をもちたまう 力の神の魔王尊 進化の光魔王尊

我らの御父魔王尊 悪のこの世を破壊して 天地の心を花咲かせ 秘伝と善のためにとて

その不思議なる御手には 他界の太陽シリアスの くだしたまえる御力（みちから）の 光の棒ぞ燃えさかる

摩訶不思議なるその棒を あまねく世界にふりかざし 土にも似たる我らをば 天つ力にあらしめよ

宇宙の進化に仕えんと いやしき心をふり放ち み前につかう我らをば 神の力に改めよ

崇高偉大の魔王尊 地軸を傾け磁極をば おきかえ移し気候をば 一変したまう魔王尊

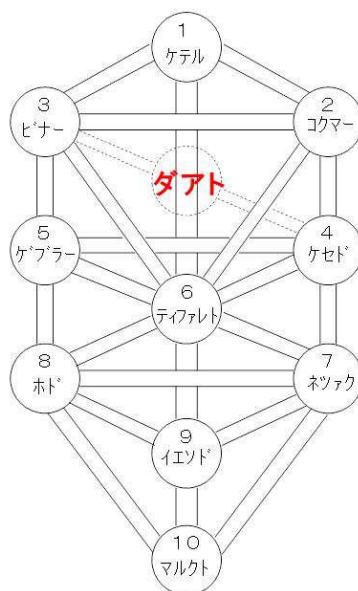
移る磁極は大地震 大洪水の地変をば 巻き起こせども御前に ひれ伏す者を助けませ

力と光の魔王尊 苦しみまどう人類に 史上の助け早めつつ つかわしたまえ 救世主

“他界の太陽シリウス”の“光の棒”とは、エデンの園の命の木に至る道を

守るために置かれたきらめく剣の炎であり、不動明王の剣の炎であり、エネルギー体としての草薙神剣と同義と見なせる。どうやら、シリウスの影響を受けて地球の大変動が起こり、その後、人類は救われ、宇宙は次の進化の段階に入る、ということである。

鞍馬では奥の院に魔王サナト・クマーラが祀られている。1,850 万年前という説もあるが、650 万年前に地球を守るために金星から飛来したとされる。“万年”はカバラ的には“たくさん”という意味だから、省略しても構わない。そうすると、“65”は“6+5=11”だから十一面観音の暗示で、これは隠されたダアト（十一面観音の裏側にある笑った顔）も含めた「生命の樹」であり、イナンナが掛けられた木が原型である。そして、金星は美の女神ヴィーナスであり、イナンナである。（イエス、ルシファーのシンボルでもある。）



峻厳の柱 均衡の柱 慈悲の柱

サナト・クマーラは地球の中心に居るとされる説もあるが、これは封印を暗示する。スーフィーのムスリムでは、サナト・クマーラはアル・ハディル（緑の人）とも見なされており、イナンナが原型のシヴァは青黒い肌、そして、鞍馬天狗のモデルとされるユダヤの赤ら顔で、緑、青、赤の光の三原色となる。封印されたのが鬼＝魔王ならば、それらは青鬼、緑鬼、赤鬼となり、鬼の角は牛の角、纏っているのはトラの皮の腰巻、手に持っているのは金棒で、“鬼”の上の点を取って“かみ”と読ませる熊野の“クカミ”一族などからすれば、封印された鬼とは本来の神＝光であり、それは牛トラ金神＝ウシトラノコンジン

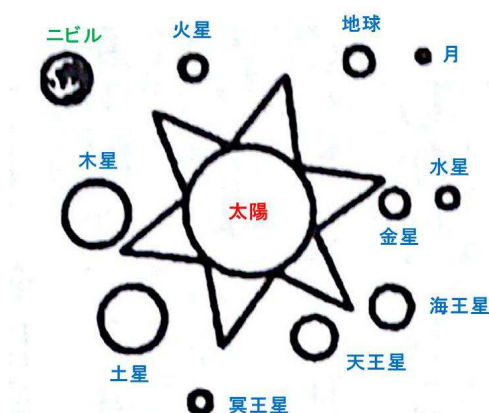
に他ならない。まさしく、鞍馬はウシ若丸が修行したとされている地である。

また、サナト・クマーラはサンスクリット語で“永遠の若者”を意味し、16歳だとも言われている。“永遠”の思想は不老不死思想の元たるイナンナが根源で、“16”はイナンナのシンボルであるロゼッタで、十六紋菊の暗示である。

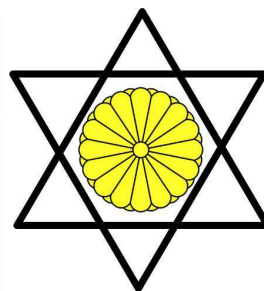
鞍馬寺の境内には六芒星が描かれているが、これはイナンナと双子の太陽神ウツ＝天照大神のシンボルである。すなわち、六芒星の中に十六紋菊が封印されている形となっている。これは、伊勢神宮参道にある灯籠に刻まれた六芒星＝天照大神＝内宮と十六紋菊＝豊受大神＝外宮の暗示でもある。

ここで、シリウスとの関係を考えると、六芒星を亀甲と見なすなら、それはエンキのシンボルで、鞍馬にはエンキとイナンナが祀られ、先のドゴン族の伝承と併せて、シリウスを暗示しているとも言える。魔王尊の歌は満月の時に歌われるので、鞍馬では月をシンボルとするエンキの方が妥当だろう。すなわち、内宮が表向きの天照大神を祀るならば、鞍馬は天照大神の荒御魂を祀るということである。これは、籠神社の極秘伝“天照大神の荒御魂は豊受大神、豊受大神の荒御魂は天照大神”と一致し、豊受大神＝イナンナである。

シュメールの粘土板に記された太陽系



「人類を創成した宇宙人」(ゼカリヤ・シツチン、徳間書店)



鞍馬山はかつて秦氏に関わる松尾山と呼ばれ、インドのクベラが仏教に取り

入れられた毘沙門天を祀る。毘沙門天は邪気を祓う北方の武神で、北方が領地だった戦いの神で雷神のイシュクルが原型で（イシュクルはゼウスの原型でもある）、イシュクルと仲が良く、戦う女神だったイナンナが重ねられたと言える。それが鞍馬になり、“その時”が近づくに連れ、封印を解くための鍵として、サナト・クマーラが勧請されたのである。従って、官長が神智学に凝って導入したにすぎない、わけではない。

このように、鞍馬とシリウスにはエンキとイナンナが重ねられているが、ここで、“他界の太陽シリアス”の“光の棒”に着目すると、不動明王以外にもこのような物を手にしている存在がいる。大天使ミカエルである。

大天使ミカエルはユダヤ教、キリスト教、イスラム教、そしてそれぞれの各宗派でも扱いが異なるが、大方、熾天使として位置づけられる。熾天使とは、Wikipediaに依れば、3対6枚の翼を持ち、ヤハウエへの愛と情熱で体が燃えているため、熾（燃える）天使＝セラフィムと言われる。旧約の民数記にはネハシム・セラフィム（燃える蛇たち）が登場するが、これは火のごとき空を飛ぶ蛇の姿で、セラフィムの起源は、セラピムと呼ばれるカルデア神話に登場する稲妻の精であり、6枚の翼を持つ蛇の姿をして炎の様に飛んだと言われている。

“6”は亀甲を暗示し、それはエンキのシンボルであり、蛇神の根源もエンキである。（炎のように光り輝いて飛んだ蛇神には、エンキの息子でエンキと共に人類創成に関わった科学者ニンギシュジツダ＝ケツアルコアトルも居る。）

また、イナンナが原型のルシファーも墮天する以前は最上級の熾天使であったとされており、ならば、ミカエルにはイナンナも重なる。イナンナはシヴァ神でもあるが、シヴァ神は一面四臂で、手足を足した数は6本である。そして、シヴァ神は手に三叉戟を持っているが、三叉戟はギリシャ神話の海神ポセイドンのシンボルでもあり、ポセイドンの原型は海神エンキで、ポセイドンは地震を司るとされる。これは、地軸を傾けて磁極を移動させ、大地震を起こす魔王尊の性質と一致する。また、シヴァ神が怒る時には激しい炎が出てすべてを焼き尽くすとされるが、これはシリウスの“焼き焦がすもの”としての性質である。そして、イナンナはスサノオの原型でもあり、スサノオは草薙神剣を八岐大蛇から取り出したので、“光の棒”は草薙神剣でもある。（八岐大蛇の逸話の原型はヒッタイトの悪竜神イルルヤンカシュ退治にイナンナが原型の女神イナラシュが一役買ったという伝承である。）

このように、エンキとイナンナを重ねることに依ってシリウスを暗示しており、六芒星は籠目紋だが、籠目に関わるかごめ歌は籠神社の隠し歌で、かつて奥宮の眞名井神社の石碑には六芒星が刻まれていた。そこで、籠神社とシリウ

スの関係についても考察するが、その前に、エンキとイナンナが深く関わる弁天様について考察する。そこにもまた、籠神社の秘伝が関わってくる。

(5) 弁天様

① 弁天様と宇賀神（ウガジン）、瀬織津姫

弁天様＝弁財天とは、宗像三神の中のイチキシマヒメ（イツキシマヒメ）のことで、水神である。アマテラスとスサノオが（籠神社に関わる）天真名井で行った誓約（うけい）の際に、スサノオの剣から生まれた五男三女神の一柱。三女神をまとめて宗像三神と言い、一般的には福岡の宗像大社が総本山とされるが、大分の宇佐神宮では土着の古い神として祀られており、実は福岡よりも時代的に古い。日本書紀の第三の一書（あるふみ）では、瀛津嶋姫（オキツシマヒメ）の別名がイチキシマヒメとされている。

ここで、瀛津と言え、海部氏が代々手渡しで継承している前漢・後漢時代の伝世鏡がある。一對の大きさの異なる鏡で、カバラの奥義である「合わせ鏡」を暗示するが、息津（おきつ）鏡・辺津（へつ）鏡で、まさに宗像の地と同名である。これこそは、実は海部氏の祖の卑弥呼が神事で使い始めた鏡であり、八咫鏡のオリジナルである。すなわち、天照大神を暗示するので、瀛津嶋姫＝イチキシマヒメは天照大神でもある。また、水神としての性質は、眞名井の水に関わり眞名井神社で祀られる豊受大神にもあり、“天照大神の荒御魂は豊受大神、豊受大神の荒御魂は天照大神”からすれば、この場合の天照大神とは、豊受大神の荒御魂であり、隠された天照大神とも言える。

さて、延暦寺の教学に取り入れられ、弁財天と習合したのが宇賀神である。

翁の宇賀神



女神の宇賀神



Wikipedia

宇賀神とは（以下 Wikipedia）、日本で中世以降信仰された神だが、宇迦之御

魂神（ウカノミタマ）に由来すると考えられており、ならば、豊受大神＝イナンナである。その姿は、人頭蛇身でとぐろを巻く姿で表され、頭部も翁や女神であったりして定かではないが、翁ならば蛇神の根源エンキ、女神ならば、両手に蛇を持つ女神としても描かれるイナンナである。

弁財天はインダスの最高神ブラフマーの妃サラスヴァティーのことで、リグ・ヴェーダの中では最高の母、女神の中の女神と賞される川の女神である。また、ブラーフマナ文献によれば、“ヴァーチュ＝言葉”と同一視され、サンスクリット語とその文字デーヴァナーガリーの創造者と考えられている。今日では、それらの発想が転じ、学問と知恵、財産と幸福、言語と芸術を司る女神となっている。

シュメールで文字を発明したのはエンキとその娘ニダバであり、ニダバはシュメールに於ける文字の女神である。ならば、エンキから知恵をもらった（奪った）イナンナが創造したインダス文明でも、エジプトのように創造神としてのエンキの影響は多大であり、サラスヴァティーにはニダバとイナンナ、そして、エンキが重なっていることになる。

また、ブラフマーの妃と言えども、ブラフマーが自ら創り出した娘でもある。マツヤ・プラーナに依れば、ブラフマーは自らが創造したこの美しい娘に夢中になった。父の熱い視線を感じた女神が右方に遠ざかると、ブラフマーの体からもう1つの顔が現れ、彼女が背後に回ると更に2つの顔が現れ、空中に飛び上がると5番目の顔が現れた。父の熱い視線から逃れられないと悟った女神は、ついにブラフマーと結ばれ、人類の祖となるマヌを産んだという。

ブラフマーは本来、大元の最高神だからアヌであり、その娘とは本来、エンキと共に遺伝子操作を行って人類を創成した女科学者でエンキの異母妹、ニンフルサグである。エンキはニンフルサグとも交わっており、実質の地球の主だから、ブラフマーにはエンキも重ねられている。ならば、元々の弁財天は、イナンナではなくニンフルサグである。

ニンフルサグは人類の母と言えるが、世界中を飛び回らなかった。対して、イナンナは世界中を飛び回り、インダスやペルシャの創造神となり、世界各地で豊穡の女神として崇められたので、イナンナにも人類の母的性質がある。また、弁財天の水神としての性質は、木に掛けられて瀕死となったものの、エンキの使者から与えられた「生命の水」を飲んで“復活”したイナンナにある。更に、イナンナが原型のシヴァ神は髪の中に洗礼の女神ガンガーを宿し、これもまた、水神の性質である。特に、これが元となっているガンジス川での沐浴などは、まさしく洗礼＝祓の女神としての性質でもあり、洗礼の大元は、水瓶

がシンボルで水神のエンキである。(ガンガーはエンキの「合わせ鏡」の女神。)

従って、弁天様と宇賀神を習合させることにより、エンキとイナンナの性質を強めており、瀬織津姫(セオリツヒメ)が弁才天として祀られる例などは、その典型的な例と言えよう。

瀬織津姫は、水神や祓神、瀧神、川神の性質を有し、祓戸四神の一柱で祓い浄めの女神で、大祓の祝詞にも登場し、穢れを早川の瀬で浄めるとされるが、古事記や日本書紀にはほとんど登場しない、謎多き神である。性質的には、甕神(オカミノカミ)や闇罔象神(ミヅハノメノカミ)、吉祥天や弁財天が該当する。(以下、Wikipedia。)

伊勢神道の神道五部書のうち、倭姫命世記、天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記、伊勢二所皇太神宮御鎮座伝記等に於いては、内宮別宮の荒祭宮の祭神の別名が瀬織津姫であると記述されている。また、古くから皇室の崇敬が篤かった廣田神社(兵庫県西宮市)では、天照大神荒御魂を主祭神としているが、戦前の由緒書きには、瀬織津姫を主祭神とすることが明確に記されていた。

以上のことからすると、瀬織津姫は真相が知れてはまずい天照大神よりも古い縄文系の神で、天照大神とは表裏一体の関係にある、と言える。陰陽的にも、瀬織津姫=水=陰に対する天照大神=日=陽で、対になっている。あるいは、本質は瀬織津姫で、それを故あって隠して天照大神を表とした、ということである。また、“天照大神の荒御魂は豊受大神、豊受大神の荒御魂は天照大神”ということからすると、内宮別宮の荒祭宮は天照大神の荒御魂を祀るので、瀬織津姫の本質は、豊穰の女神で太陽女神、航海の女神(水の女神)で、かつ、根源神である豊受大神=国常立尊と言える。そして、豊受大神の性質は、カバラ的には女神イナンナであり、水に依る祓い=洗礼の性質は、エンキを「合わせ鏡」で女神としており、洗礼の女神ガンガーと同じである。そして、ガンガーはイナンナを「合わせ鏡」で男神としたシヴァ神の髪の中にいる。この「合わせ鏡」で逆にしていることは、太陽の「合わせ鏡」がシリウスで、それが本来の太陽だからであると考えられる。ならば、そこにドゴン族の伝承を併せると、イナンナよりもエンキの方がシリウスに関わりが深いと言える。

エンキは地球の主であり、アヌンナキの王子で大神アヌの長男であり、地球は太陽の影響を受けている。アヌンナキの星ニビルが神ノンモ=エンキの故郷でシリウス系のニャン・トロ=シリウス D ならば、エンキを主としてイナンナを重ねることに依り、太陽がシリウスの影響を受けている、換言すれば、シリウスこそが本来の太陽であることを暗示しているのである。

②ツキヨミと大山祇神

ここで、エンキのシンボルが月であることに着目する。日本神話で月の神と
言えば、ツキヨミが思い浮かぶ。イザナギが禊した後、左目からはアマテラス、
鼻からはスサノオ、右目からはツキヨミが生まれた。しかし、その後、ツキヨ
ミはほとんど登場することが無い。つまり、故あって隠されたわけであり、こ
れは瀬織津姫と同義である。

ツキヨミは、古事記ではイザナギが夜の世界を治めるよう命じたが、日本書
紀では海原となっており、海原は古事記ではスサノオとなっている。

また、日本書紀では天照大神から食物の神・保食神（ウケモチノカミ）と会
うよう命じられたが、保食神はもてなしの食物を口から吐き出したので、ツキ
ヨミはけがらわしいと怒り、保食神を剣で刺し殺し、その保食神の亡骸からは
牛馬や蚕、稲などが生れ、これが穀物の起源となったとされる。対して古事記
では、スサノオが食物の神・大気都比売神（オオゲツヒメ）のところに行くも
のの、オオゲツヒメは鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していたと
ころ、スサノオは汚らわしいとして怒り、オオゲツヒメを斬り殺し、その亡骸
の頭から蚕が、目から稲が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から麦が、尻か
ら大豆が生まれたとされる。

これからすると、スサノオとツキヨミは同質であり、その共通する性質は“海
原”“食物”“剣”で、“海原”は海神エンキと航海の女神イナンナ、“食物”は
豊穰の女神イナンナが原型で、“剣”はシリウスの“光の棒”の暗示である。し
かし、わざわざツキヨミとスサノオが分けられているのは何か違いがあるわけ
で、ツキヨミが故あって隠されたのも、そこに理由があると考えられる。その
違いとは“海原”としての性質で、すなわち、エンキとイナンナの違いである。

イナンナは海部氏が奉ずる弥生海人の最高神である。かつて、海部氏の邪馬
台国（ヤマトの国）として国が統一される直前、最後まで狗奴国（くなく）
が抵抗していた。これは、古代に於いては政祭一致だったので、最高神が異な
っていたからである。狗奴国は弥生以前の縄文王家だからこそ、最後まで抵抗
したのである。（弥生後期、原始キリスト教の秦氏に対して弥生王家の海部氏が
最後まで抵抗していたように。）縄文人は山のイメージが強いが、実際には海人
である。ならば、これは縄文海人と弥生海人の祭祀闘争で、弥生海人の最高神
がイナンナならば、縄文海人の最高神はエンキだったのである。狗奴国という
名称には“狗”があり、これは犬のことで、シリウスは大犬座にあり、英語で
は“Dog star”と言われるからシリウスの暗示でもあり、シリウスのカバラ的な
メインはエンキである。そして、シリウスは“天の狗”だから“天狗”の元で、

ならば、鳥天狗＝八咫鳥の大元も原始キリスト教徒の秦氏ではなく、縄文海人にあると言える。そして、「合わせ鏡」で“Dog star”を見るならば、“God star”となり、シリウスは本来の神の星なのである。その神の名を、日本では瀬織津姫とし、後にツキヨミが重ねられ、隠されたのである。

さて、イザナギの顔を日本列島に重ね、こちら側を向いているとすれば、経度的にスサノオ＝豊受大神を祀る籠神社は鼻、アマテラスを祀る神宮は左目に相当する。ツキヨミは外宮と内宮の両方の別宮として祀られているが、顔の位置関係からすれば、それらの別宮が本質ではない。では、本来のツキヨミを祀るのは何処なのか？ヒントは、前述の縄文海人にある。

縄文海人は後に隠れ、山の民にもなった。つまり、海の民でもあり、山の民でもある。これを神に喩えると、海の神でもあり、山の神でもある、ということである。この性質を有する大元の神は、娘のコノハナサクヤヒメ（富士山の神！）が天孫ニニギノミコトと結婚した大山祇神（オオヤマツミノカミ）である。この神名の“ツ”は“の”の、“ミ”は“神霊”の意味なので、“大いなる山の神”という神名だが、別名が和多志大神（ワタシノオオカミ）で、“ワタ”は“海”の古語なので、“海の大いなる神”でもある。この大山祇神を祀る大元の神社が、愛媛県にある大山祇神社である。

すなわち、距離は離れているものの、右目に相当するツキヨミを祀るのは大山祇神社であり、大山祇神とツキヨミは同義である。大山祇神は記紀では表されていないが、それは隠された縄文海人とその最高神エンキを暗示するためである。そして、“和多志”は“多くの志が和す”という“和の精神”の根源であり、それは一人一人が宇宙創造のエネルギーの分身であるという、この宇宙の根本原理をも表しており、これもまた、“太陽神崇敬”に隠された極めて重要な意味である。なお、俗的には“山の神”と言えば妻のことを表し、山の神は修験道などでは女神と見なされている。これは、カバラ的には陽の天神に対する陰の地祇ということだが、女神という点では大地の豊穰神イナンナが重ねられている。ここでもエンキとイナンナが重なって、それは本来の太陽であるシリウスを暗示する。

ツキヨミが外宮と内宮の両方の別宮として祀られていることは、とても重要な神であることを暗示しているが、それはこのような理由からである。そして、縄文の最高神はエンキだった、ということは、日本は地球の中の隠された弃天様の役割、ということである。なお、昭和初期に大山祇神社の三島宮司が「天孫人種六千年史の研究」で日本とシュメールの深い関係を明らかにしている。

(6) シリウスと籠神社

①シリウスの和名とかごめ歌、眞名井

シリウスの和名の 1 つに与謝（よさ）星がある。与謝と言えば、籠神社奥宮の眞名井神社を与謝宮とも言う。眞名井神社では豊受大神＝国常立尊＝イナンナを祀り、眞名井は宇宙の真理をも表す（*）。ならば、与謝宮はモーゼ亡き後、ヘブライの民を約束の地に導いたエフライム族（**）のヨシュアも暗示するが、根本の意味はシリウスである。故に、太陽を表す神宮と表裏一体を成す。そして、“ヨシュア” というのは救世主も意味するが、まさしくシリウスの真相が明らかにされるのが、救世主の登場に繋がるということであり、「魔王尊にささげる歌」の内容と一致する。（残念ながら、籠神社＝本来の伊勢である伊雑宮ラインは、聖方位ではない。）

それはまた、籠神社の隠し歌である“かごめ歌”に繋がる。“鶴と亀がすべった”という部分である。鶴は眞名鶴のことで、本来の神宮で籠神社と表裏一体を成す伊雑宮の逸話に登場するが、海部宮司に依ると、太陽に最も近い所を飛ぶ鳥とされている、という。その様子は炎の鳥、不死鳥フェニックスであり、その原型はイナンナである。亀はエンキのシンボルだから、“鶴と亀がすべった”ということは“イナンナとエンキが続べる”ということ、それはシリウスの真相が明らかになることに他ならない。そして、ここでも宇宙の真理を表す“眞名”である。また、“籠の中の鳥”の“鳥”が眞名鶴ならば、それはイナンナ＝豊受大神で、豊受大神を祀る眞名井神社の石碑には、かつて六芒星が刻まれていた。これでまさしく“籠の中の鳥”となり、鞍馬の構造（境内の六芒星と奥宮で祀られる魔王尊）と同じで、隠されたシリウスのことである。

*眞名井

“眞”は人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛（てん：逆さま）”の原字である。つまり、この世の物質世界は“主体”である宇宙創造のエネルギーが“客体”となった状態であり、宇宙創造のエネルギーの中に浮かんで、主体を認識できないような井戸のような状態だから“眞名井”である。では、“名”の意味するところは何か？

宇宙の歴史からすると、宇宙創造のエネルギー自身が、自らが何なのかを知るために、生命体とその活動の場（器）となる宇宙を創成した。それにより、エネルギーの塊の状態ではできなかった、感覚というものを通して感じ、様々なことを認識・経験し、進化できるようになった。

その生命体が物質を認識したり、自らと他を区別するためには、“名”が必要となった。（自己の誕生。）それは単に、識別のためだけのものだった。しかし、人類型の生命体が誕生してから、「あなたとわたし」という単なる識別に、「あなたの物と私の物」という所有の概念が付随し（「私」は「禾＝稲」を「ム＝取

り囲んで自分のものとする」ということで「自分の稲とする」所有の概念)、それがいつしか膨らんで、「あいつのアレが欲しい」という欲望が発生した。これがエゴである。エゴがエゴを呼び、その所有欲から憎しみが生まれて戦争が発生し、遂には、自らが大元のエネルギーの分身（己、巳＝一つ巳）であることを忘れてしまった。これはとりわけ、シリウス系と太陽系を結ぶ惑星ニビルの住人アヌンナキが人類の遺伝子を操作して進化に介入し、人類に対して“神々”として振る舞い、人類が神を自らの外に求めることによって助長された。それにより、人類にはエゴが渦巻き、本来の性質（本質）が解らなくなってしまったのである。

従って、“名”にへばり付いたエゴ＝所有という欲望の塊を洗い流せば、本来のあるべき姿となる。すなわち、禊であり、禊の大元は洗礼のエンキと、エンキから「生命の水」を与えられて復活したイナンナである。

また、表向きの天照大神は太陽なので光の反対側には影ができるが、本来の天照大神は豊受大神＝天御中主神（籠神社極秘伝）で、シリウスから連なる宇宙根源のエネルギーの光であり、影をつくらず遍く照らす。

**エフライム族

エフライム族はヘブライ 12 支族の内、いわゆる“失われた十支族”で、その王家である。残りの二支族は後に原始キリスト教徒＝狭義の秦氏の中核を成したが、実は十支族と二支族には血縁関係が無かったことが、三笠宮殿下などのオリエント学者や聖書研究者の間では定説となっている。これまた、彼らとは血縁の無いダビデという強い盗賊の首領が両支族に貢物をして取りまとめたものの、ダビデ亡き後、息子のソロモンの時代にはダビデという強いタガが外れたので、元通り、分かれたのである。

十支族はサマリアに居たが、サマリアとは“小さなシュメール”という意味で、シュメール王家の流れを汲み、エフライムはその中のトップである。それ故、エフライム族は神器としてアロンの杖と王の印として鉄剣を持っており、それらは日本では草薙神剣ともされ、海部氏と兄弟分家の尾張氏の宮、熱田神宮で祀られている。その草薙神剣のエネルギー体は、前述のようにシリウスのエネルギーである。なお、シュメールでは王権が定期・不定期に都市を巡り、都度、各都市の守護神が最高神とされた。また、王は“神＝アヌンナキ”と地球人のハイブリッドの場合もあれば、“神”が任命した場合もあった。そのため、シュメール王家と言っても、何系統が存在する。

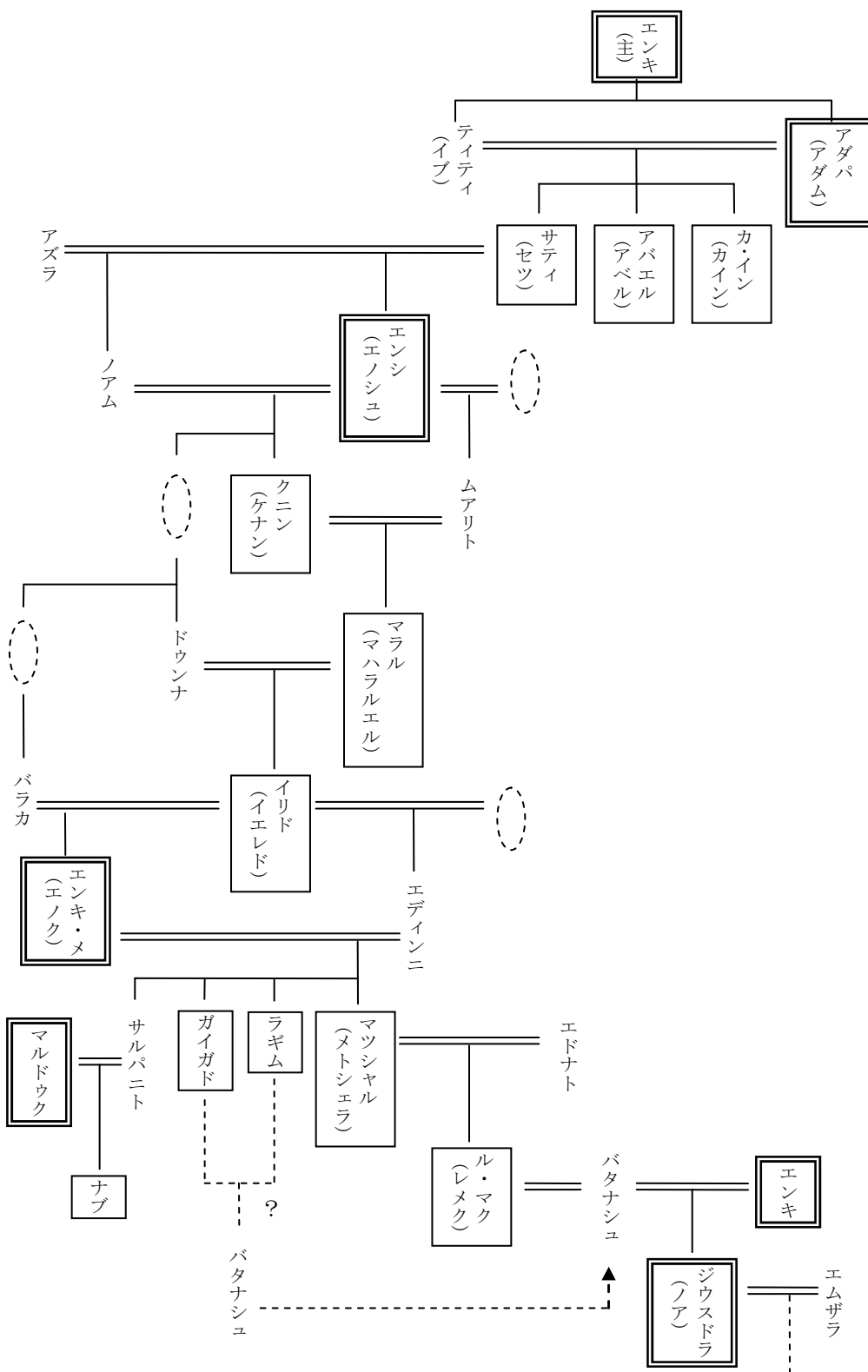
さて、更に興味深いことに、古代ギリシャやローマではシリウス A は赤い星とされていた。バビロンの粘土板にはシリウスが赤かったと伝える記録があり、

ローマの哲学者セネカ（紀元前 1 年頃誕生）などもシリウスを赤い星と書き残しており、プトレマイオス（紀元 83 年頃誕生）はシリウスを明るい赤みがかった星と記している。単純に考えるならば、シリウスが赤色巨星から白色矮星へと変化したということだが、シリウス A は通常の恒星であって、白色矮星ではない。ならば、赤いシリウスとは何なのか？

“神々”の星ニビルは、地球に近づくと天空に赤く輝いた。それを、シリウスと見なしていた可能性がある。シリウスを覆うようにニビルが輝いていた、あるいは、ニビル最接近の際には夜空で最も明るく輝き、故に、それをシリウスと見なした（誤解した）のであろう。すなわち、ニビルとシリウスの深い関係の暗示である。セネカもプトレマイオスも、イエスが誕生して活躍した頃の人物であり、イエスはおそらくエンキと人間のハイブリッドで（***）、イエスが十字架上で息絶えた時、地震が起きて暗闇が覆ったが、これはニビルの最接近現象と考えられる。また、バビロンはあらゆる神々の属性を取り入れて最高神として振る舞ったマルドゥクの統括地であり、大元の神であるシリウスの属性をニビルに重ねたこともあろう。

***アダパはエンキが初めて地球人女性と交わって生まれ、聖書で言うところのアダムである。ジウストラは、エンキがアダパの子孫である地球人女性バタナシュに産ませた子で、聖書で言うところのノアである。すなわち、人類にとって重要な出来事に関わる地球人は、エンキが地球人女性と直接交わって生まれている。エンキは「天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら、起こったことは、また発生するのだろうか？“過去”は“未来”なのか？」と言っており、歴史が繰り返すことを暗示している。

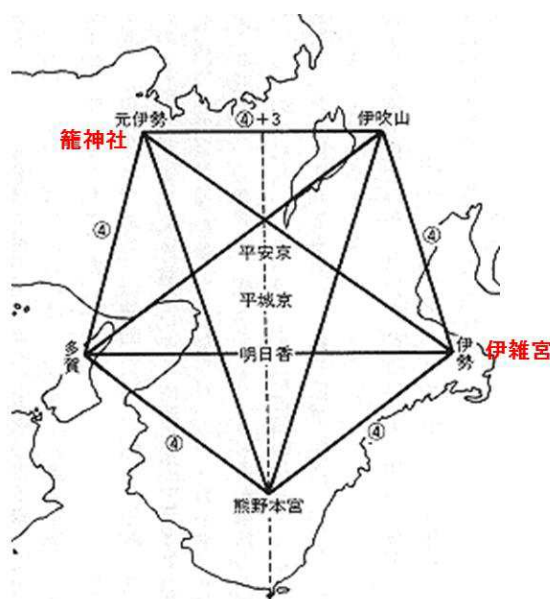
また、縄文時代の最高神はエンキとイナンナで、エンキを最高神とする一族が権力を握っていた。その後、イナンナを最高神とする一族＝海部氏が渡来して弥生時代となり、更にイエスを最高神とする原始キリスト教徒＝狭義の秦氏が渡来して王権委譲が起こり、大和朝廷が成立した。弥生のイナンナを最高神とする一族（邪馬台国）は縄文のエンキを最高神とする一族（狗奴国）と最後まで敵対しており、同様に、原始キリスト教徒とも敵対した。しかし、“敵の敵は友”の論理で、縄文のエンキを最高神とする一族と原始キリスト教徒が手を結び、大和朝廷設立となった。古代に於いては祭祀が最も重要だから、単に“敵の敵は友”ということだけではなく、最高神が同じだったからだろう。すなわち、縄文の一族はイエスの後ろにエンキが居ること＝エンキの息子であることを悟ったため、手を結んだと考えられる。（エンキは地球の主であり、イエスが「父」と言っているのはエンキである。）



②六芒星と五芒星

エンキは基本的に隠されているから、六芒星はエンキではなく、表に出ている太陽神ウツのシンボルと見なすのが妥当である。(鞍馬はそもそもが神宮の裏なので、六芒星はエンキの暗示でも良い。)

数秘カバラ的には、6は5の裏である。しかし、6=六芒星=太陽が表に出ているので、5は裏の扱いとなる。ならば、この場合は通常五芒星ではなく、逆さ五芒星となる。そして、太陽に対する“裏の5”とはすなわち、太陽と表裏一体を成すシリウスである。この逆さ五芒星は、籠神社と伊雑宮を結ぶ形で、近畿地方に巨大な図として描かれている。



<http://uumusou.yamanoha.com/monoomoi/qbl-index.html>

逆さ五芒星の先端は熊野本宮である。大邪馬台国は纏向を中心とした場所にあったと思われ、それに最後まで抵抗していたのが、その南にあったとされる狗奴国で、熊野は位置的にまさしく狗奴国に該当する。落合莞爾氏の一連の著書や常陸国風土記の考察、海部氏の渡来経路などからすると、縄文の王家=縄文海人は鹿島・香取(延喜式で伊勢の神宮と並び神宮と称されたのは鹿島と香取のみ)、元宇佐~始良(宇佐は皇室第2の祖廟で、かつ籠神社第82代宮司・海部光彦氏の出生地で、始良は海部氏の祖である天村雲命がアイラ姫を娶った地)、そして紀伊にあったと推定され、その最大勢力が紀伊で、後の和田・楠木一族であると考えられる。(三王家なのは、元宇佐の祭神・宗像三神で暗示されている。)

熊野本宮の神職は現在、弥生海人の尾張氏・海部氏に連なる九鬼(クカミ)

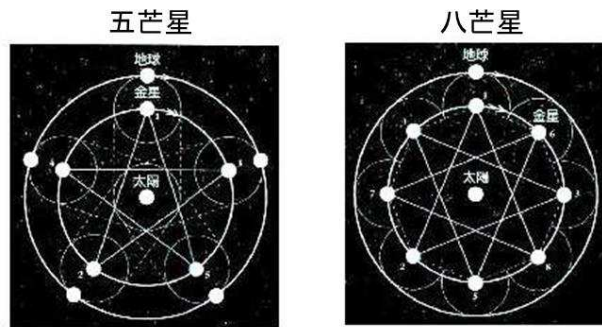
一族で、熊野国造家の祖神も尾張氏・海部氏系の天火明命とされている。しかし、古代から中世にかけては、熊野国造の流れを汲むとされる和田氏が世襲していた。ここで、熊野国造に尾張氏・海部氏と和田氏が合わされている。また、八咫鳥が舞い降りた地とされ、秦氏も合わされており、縄文—弥生—大和朝廷がすべて含まれる。逆さ五芒星のすべてを結ぶ頂点に熊野が位置するのは、そのためである。

祭神は家都美御子大神（ケツミミコノオオカミ）で、スサノオとされるが、他にもスサノオの子のイソタケルやイザナミ、菊理媛などとも言われ、素性は不詳とされ、第10代・崇神天皇の御代には3体の月が降臨し、その月の1つが家都美御子大神だという伝説が残される。スサノオ＝菊理姫＝イナンナだが、それが月として表現されていることは、月をシンボルとするツキヨミ＝エンキも重ねられているわけで、すなわち、シリウスの暗示である。

この祭神名はこのままでは意味不明だが、御神酒を“おみき”と読むので、“ミ”は“神”であり、“ミミ”で“神々”となる。そして、“ケツ”を“尻＝シリ”と読み替えるならば、“ケツミミコノオオカミ”は“シリウスの神々（の子）の大神”となる。確かに、スサノオの逸話には、天照大神の居る高天原の神殿で大便を撒き散らしたとか、オオゲツヒメ（＝大きな尻の姫）を斬り殺したなど、“尻”に関わる話が多い。これらは実は、“尻”の話としてスサノオ系を陥れているのではなく、シリウスを暗示していたのである。

他に逆さ五芒星と言え、黒魔術師として悪名高きアレクスター・クロリーが崇拜のシンボルとして使用した。そのため、逆さ五芒星はサタンのシンボルとされるが、サタン＝ルシファー＝イエス＝イナンナであり、これまでの考察から、これは真の太陽であるシリウスの暗示である。“666”が西洋では“獣＝サタンのしるし”とされるが、日本では“3つの6＝弥勒＝救世主”とされるのと同様である。

真の太陽が隠されている五芒星ならば、表に出ている五芒星もある。金星である。金星はイナンナ＝イエス＝ルシファーのシンボルであり、空海が飲み込んだとされ、星のシンボルとしては八芒星として描かれるが、天空には実は五芒星も描かれる。太陽、金星、地球が一直線に並ぶ時を合（ごう）と言い、合には内合（太陽—金星—地球）と外合（金星—太陽—地球）がある。金星の内合は584日毎に起こり、8年間で5回起きる。つまり、1回につき地球年で8/5年であり、地球の公転軌道を5等分すると、内合の位置は軌道上で8/5周ずつずれていくことになる。それを順に結ぶと、五芒星が形成される。



「古代マヤの暦」(ジェフ・ストレイ著、創元社)

一般的には観測により会合周期を調べ、ケプラーの法則に従って公転周期を計算する。金星の公転周期は 224.7 日で、この公転周期より、地球が太陽を 8 周する間に金星は 13 周するから ($8 \times 365 \div 13 \times 225 \div 2,920$)、地球が 1 周した時には、金星は $13/8$ 周 = $(1 + 5/8)$ 周進んだ位置になる。よって、地球の特定の日の金星の位置を 8 年分繋げると、軌道上に八芒星が描かれる。

すなわち、地球の 8 年は金星の 13 年に相当し、会合周期を結ぶと軌道上に五芒星が形成され、地球と金星の公転の位置関係を結ぶと八芒星が形成される。(つまり、イエスに関わる“不吉な 13”の真意は金星と地球の関係にある。)

故に、このような天体の深い知識を知ることは、すなわち、宇宙の叡智そのものであり、五芒星は知恵のシンボルとされた。そのため、五芒星は“ソロモンの知恵”と言われるほどの賢者だったソロモン王に因んで“ソロモンの星”とも言われる。(創造神ブラフマーの頭の数が 5 ということも対応。) 太陽神でエルサレムの司令官だったウツのシンボルの六芒星は、ソロモンの父ダビデに因んで“ダビデの星”である。そして、8 (=ヤー) は日本に於ける聖数である。

魔王サナト・クマーラ=イナンナは知恵の女神であり、空海が金星を飲み込んだことは、このような深遠な知恵を悟ったことの暗示である。

③空海

ここで、空海と籠神社には深い関係がある。表に出ている伝承は以下である。

・空海は籠神社世襲宮司家の 31 代当主・海部直雄豊の娘である巖子姫との間に神秘的な物語が伝えられている。巖子姫は 10 歳の時に京都頂法寺の六角堂に入り、如意輪の教えに帰依し修行を積み、20 歳の時、時の皇太子であった大伴皇子(後の淳和天皇)に天性の美しさを見初められ、第 4 妃として迎えられ、名前を故郷に因んで真井御前(まないごぜん)の名を戴き、淳和天皇の寵愛を一身

に集めた。そのため、女官たちの嫉妬に遭い、宮中を出て西宮の如意輪摩尼峰に神呪寺（かんのうじ、甲山大師）を建立した。この年、真井御前は空海を甲山に迎え如意輪の秘法を修し、2年後の28歳の時に如意輪像を造ろうとした空海が大きな桜の樹を選び、その生き姿を33日間で彫刻した。真井御前は33歳の時に師・空海の坐す高野山に向かって如意輪観音の真言を誦しながら遷化した。その翌日、空海は真井御前の後を追うように62歳で入定した。

これだけでは、西宮に行ったこと、そこに空海を迎え、空海がわざわざ真井御前の像を彫った理由が不明である。そこで、「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図（籠神社）」を見ると、次のようなことが書かれている。

・真井御前は海神の霊能のシンボルである潮満珠（しおみつたま）・潮干珠（しおふるたま）を入れた秘蔵の筐（はこ）を父から持たされ、空海はこれを真井御前から与えられた。

これは、海神・大綿津見神の娘・豊玉姫から天孫・山幸彦が潮盈珠（しおみつたま）と潮乾珠（しおふるたま）をもらったことと同義である。すなわち、空海の血統が並々ならぬものであることを物語っている。

また、真井御前＝巖子姫の父は雄豊（オトヨ）で、トヨの大邪馬台国時代の大王オトヨノミコトを暗示させ、この大王こそ第10代・崇神天皇である。

海部氏の女性は、卑弥呼やトヨ以来、巫女的性格を帯びている。（それ故、海部氏・尾張氏系から何人もの妃が皇室に嫁いでいる。）その巫女が、秘蔵の神宝を託したことは、空海と真井御前が単なる師と弟子の関係ではなく、もっと深い関係にあったことを意味する。故に、真井御前は空海の手によって、嫉妬渦巻く宮中から西宮に遷されたと見なすのが妥当である。

西宮には前述の廣田神社があり、天照大神荒御魂＝瀬織津姫が祀られている。そして、神呪寺（“神呪”とは、“神を呪う”とか“神が呪う”などの意味ではなく、真言・マントラ・仏の真の言葉、の意味）は弁財天を祀っているから、やはり瀬織津姫で、この地が縄文海人の拠点であることが解る。（故に、“西の宮”である。）ならば、潮満珠・潮干珠の逸話も併せると、真井御前が弥生海人王家であるのに対し、空海は縄文海人王家の可能性がある。

空海の幼名は佐伯眞魚（サエキノマオ）で、佐伯氏である。佐伯氏には豊後佐伯氏などいろいろな系統があるようだが、ここでは豊後佐伯氏と巖島神主家に着目する。（以下、Wikipediaを参照した考察。）

豊後佐伯氏についても諸説あるが、大和大神（オオミワ）氏の分流である大

神良臣（オオミワヨシオミ）が豊後介を任じられた後、子孫の大神（オオガ）惟基が豊後大神氏の始祖となつたとする説が有力だが、宇佐神宮の宮司であつた宇佐大神氏に出自を求めるものもある。いずれにしても、縄文海人の宇佐に関わる豊後国海部郡を本拠としていたことからすると、縄文海人系の可能性が高い。

巖島神主家は推古元年（593年）、イチキシマヒメの神託により巖島神社を創建して初代神主となつた巖島に住む佐伯部の有力者、佐伯鞍職（サエキノクラモト）が初代とされる。ここでもイチキシマヒメ＝瀬織津姫が登場するから、やはり佐伯氏は縄文海人の系統であろう。

そして、籠神社の秘伝に依ると、祖神の彦火明命がイチキシマヒメを娶つたことになっている。両神は神話に登場する神だが、神話にはしばしば人間界の出来事が投影され、謎を解く鍵とされている。だから、これは海部氏の初代大王が縄文海人大王家の姫を娶って和平を結び、弥生時代が始まつたことの暗示と見なすことができる。（籠神社付近でも縄文遺跡が発掘されている。）そうすると、後の世まで海部氏と縄文海人王家との深い関わりが続いていてもおかしくない。

また、如意輪観世音菩薩は聖徳太子の護持仏とも言われる。かつて海部氏の領地だった広隆寺にある聖徳太子像には、即位の礼で陛下のお召しになった装束が着せられるが、これは聖徳太子が隠された大王であったことを意味する。秦氏に依る正史では聖徳太子は皇子だが、わざわざこのような丁重な扱いがされるのは、正史に隠された大王こそ、聖徳太子のモデルであることを暗示している。他に如意輪観世音菩薩が祀られるのは石山寺（滋賀県大津市）、園城寺（滋賀県大津市）、六角堂（京都市）、室生寺（奈良県宇陀市）、岡寺（奈良県明日香村）、橘寺（奈良県明日香村）、青岸渡寺（和歌山県那智勝浦町）、観心寺（大阪府河内長野市）などがあり、いずれも高野山や弥勒菩薩など秦氏に関わる寺だが、中でも観心寺は楠木氏の菩提寺であり、楠木正成と南朝縁の寺としても知られ、青岸渡寺は熊野那智大社で祀られていた如意輪堂が明治以降に青岸渡寺として復興したことからすれば、これらは実は縄文海人系の和田・楠木氏を暗示していると言える。

よって、空海は縄文海人の一族と考えられ、中でも王位に匹敵する立場であろう。

さて、真井御前の生き姿は33日間で彫刻され、真井御前は33歳の時に空海の坐す高野山に向かって遷化した。“33”は「生命の樹」に於いて、隠されたダクトも含めたセフィラとパスの数である。そして、真井とは当然、眞名井のことで、宇宙の真理を表している。つまり、このような空海の逸話は、空海が海

部氏と関係を持ち、宇宙の真理を悟ったが故に、「生命の樹」に関わる“33”をキーとなる数字として創られた逸話である可能性が高い。

空海の口に明星＝金星（虚空蔵菩薩の化身）が飛び込んできたとされるのは室戸岬の御厨人窟（みくろど）だが、“御厨”とは“みくりや”のことで、神饌を調進する場所である。神饌に最も深く関わるのは海部氏の豊受大神＝イナンナであり、イナンナのシンボルはまさしく金星である。豊受大神は“トヨケ”とも言われ、“ケ”は御饌（みけ、神饌）を意味するが、他に“水気根源”“生命の根源”という意味もあり、根源神・国常立尊でもある。

また、“眞名井”は古くは“魚井”と書かれており、空海の幼名は“眞魚”で、共通するのは“魚”である。魚をシンボルとするのはエンキ（とその息子と考えられるイエス）だから、これでイナンナとエンキが重なり、シリウスの暗示となる。

従って、やはり空海は縄文海人の中の最重要人物と言える。空海は様々な足跡を残したが、多くは水銀鉱山に関わっている。高野山の丹生などは名の如くだが、丹生は秦の始皇帝が求めた不老不死の妙薬とされ、不老不死思想は海部氏の神髄であり、丹生一族は海部氏一族である。また、水銀は金とアマルガムを形成し、あたかも金を溶かすように見える物質で、この水銀アマルガムは寺社の金メッキに多用された。すなわち、空海と海部氏との接触逸話には、不老不死の丹生＝水銀が深く関わっている。

④縄文海人

縄文王国は環太平洋文明圏（言うなればムー・レムリア文明圏）の中心であることは言うまでもないが、では、縄文海人とはどういう系統なのだろうか？

最新の遺伝学では、人類の祖はアフリカで、中南米のインディオと縄文人は祖を同じくするという。エンキがアフリカで遺伝子実験をして人類は誕生したので、アフリカ起源は当然で、そこからエンキの遺伝子を引き継いだアダパが誕生し、カ・インとアバエルが誕生した。カ・インは嫉妬でアバエルを殺したので中南米に追放されたが、アフリカ～中東ではアバエル亡き後のアダパの息子サティの子孫が広がり、それがユーラシア大陸へ広がった。しかし、大洪水で多くは滅びたものの、縄文遺跡の状態から推察すると、大洪水ではすべてが水の泡になったわけではないだろう。そして、大洪水後に助かった中南米のカ・インの系統は環太平洋地域に広がったので、大洪水後の縄文人はサティの子孫とカ・インの子孫の混血と考えられる。これをここでは前期縄文人と呼ぶが、彼らが海部氏渡来時の縄文王家なのだろうか？

言語学的な考察から、その後、周辺の東南アジアなどからも渡来があるが、シュメール王家を引き継ぐ海部氏が娶うような王家が既に縄文日本にあったわけである。それは、やはり“罪人”カ・インの系統ではなく、別のシュメール王家の系統と見なすのが妥当である。

ここで注目すべきは支那の古代文明である。ゼカリア・シッチン氏の著書ではインダスや中南米についての記述は出てくるものの、何故か、意図的に支那（と日本）は外されている。また、皇室筋から情報を得ている落合莞爾氏に依ると、縄文海人は砂金を集め、それが現在の世界金融を支えている日本の資金の基になっており、朝鮮半島北部の羅津（らじん）が大きな拠点の1つだという。そして、その縄文海人は、シュメール文明開化直前にイラクのウバイドから航海して来たウバイド人ではないか、と推測している。

しかし、ウバイド人は後のシュメールに含まれるウバイドに居たので、どこかに行ってしまったのではなく、シュメール人と化したとも考えることができる。そこで、大陸で金（きん）に関わる重要な古代王朝に着目する。それは、古代四川にあった古蜀（こしょく）である。

四川にはその名の通り、長江に注ぐ4つの川、岷江（みんこう）、沱江（とうこう）、涪江（ふうこう）、大渡河（だいとが）が流れるが、エデンの園もチグリス、ユーフラテス、ギホン、ピションの4つの川に囲まれていたことから、エデンの園の支那版と言える。この古蜀では黄金文明が栄え、黄金はアヌナキに関わる。この文明は幻とされる夏（か）王朝以前の文明で、支那各地の文明は少なからずもこの古蜀の影響を受けている。漢字の基もシュメールの象形文字であるところは言語学的に判明しており、四川省では漢字成立以前の古い、象形文字のような巴蜀（はしょく）文字も発見されているし、羽のある人間“羽人（はじん）”も見つかっている。これなどは、驚人間とされたアヌナキの様相を模したものであろうが、天狗の元と見なすこともできる。

また、夏王朝の始祖とされる禹（う）は、Wikipediaに依れば、黄河の治水事業で功績を成し、“禹”という文字は蜥蜴や鱉・竜の姿を描いた象形文字とされ、故に、禹の起源は黄河に棲む水神だったとも言われている。ならば、これは水に関わる爬虫類をシンボルとした水神エンキになぞらえた王であり、夏に先行する古蜀がエンキを最高神とする王国だったからこそ、と推定される。エンキは大洪水後の治水工事を指揮したし、三星堆遺跡で発見される古蜀文化を引き継いだとされる文明では青銅器が多々発見されるが、エンキは“銅の彼”とも言われ、銅と関わりが深い。（ただし、青銅の発見はエンリルの長子ニヌルタに依る。）そして、本来のエデン＝エ・ディンはエンキが統括する土地だった。

以上のことから、地球の主エンキを最高神とする古蜀の流れを汲む一族が支那に広がり、その一部が縄文日本に渡来して王家となったとすれば、縄文の最高神がエンキ＝瀬織津姫だったことと矛盾しない。

そして、前述のように、烏天狗＝八咫鳥の大元は原始キリスト教徒の秦氏ではなく縄文海人にあるが、「禹＝う」という読みは「烏＝う」に通じ、羽人をも考慮すれば、おそらく烏天狗の元もまた、この古蜀の流れを汲む一族であろう。そして、烏天狗は、後に縄文海人のバックアップを受けた秦氏のシンボリック存在となった。

このように、環太平洋文明圏にエンキを最高神とする古蜀の流れを汲む一族が渡来して縄文王国を築いた。そこに、シュメール王家の血統かつ十支族系でイナンナを最高神とする海部氏が渡来し、縄文王国と和平を結んだ。海部氏は製鉄技術を持ち込んだが、縄文王国は青銅器で、鉄の威力には敵わなかったのである。その後やや遅れて、秦帝国（ペルシャ系十支族ユダヤでイナンナが創造神）の徐福率いる一団が渡来し、海部氏と婚姻関係を結んで弥生時代が始まった。しかし、縄文海人の中には一部、それに抵抗する者たちがいた。やがて、原始キリスト教徒の一団が渡来し、大王フルが海部氏に婿入りして、強制的に王権が移譲され、大和朝廷が成立した。この時、海部氏に抵抗していた縄文海人一族がイエスの裏にエンキがいることを悟ったので秦氏に協力し、以後、裏から支えるようになった。

海部氏は製鉄技術を持ち込み、鉄鉱石が豊富な朝鮮半島に進出し、新羅を建国して、朝鮮半島から羅津にかけての航海経路を仕切っていた。（更に、不老不死の丹生に関わる水銀鉱山も。）対して、縄文海人は金に関わる。落合氏の言うように、その金が現在に至る世界金融を支えているのであれば、その大陸側の重要拠点である羅津は海部氏の航海経路に含まれていることから、海部氏の存在は矮小化され、朝廷に海産物を献上するような話に変えられたのである。大和朝廷に於いて、その程度の存在で“海部直（アマベノアタイ）”を名乗ることがずっと許されていたのは、航海に関わる重要な事を、海部氏が握っていたからに他ならない。

(7)オリオン

ここで航海の話が出てきたが、弁天様のイチキシマヒメを含む宗像三神は航海の女神である。かつて、シリウスの側に輝くオリオンの三つ星は航海の目印とされ、宗像三神の対となる航海の神、住吉三神（底筒男命、中筒男命、表筒男命）は筒が星を意味する古語であることから三つ星の象徴ではないかとも言われている。また、グラハム・ハンコック氏に依れば、エジプトのピラミッド

は三つ星を地上に投影したものだという。実は、冬の大三角形を形成するシリウスとオリオンの間には、それ以外のカバラ的な関係がある。

①神宮の配置とピラミッド

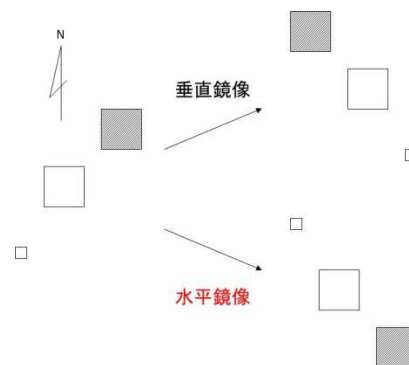
外宮、内宮、そして本来の神宮である伊雑宮の配置は、三つ星と水平鏡像の関係にある。



オリオン座



<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%AA%E3%83%B3%E5%BA%A7+%E5%9B%B3#mode%3Ddetail%26index%3D66%26st%3D2530>

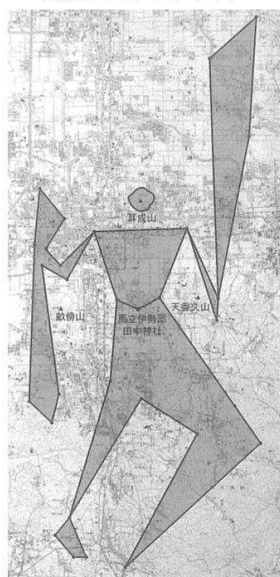


②奈良盆地に展開するオリオン

奈良盆地の春日神社を結ぶと、耳成（みみなし）山を頭部としたオリオンに似た巨人像が描かれる。春日神社の総社は春日大社だが、その祭神は第一殿が鹿島神宮から勧請した武甕槌命（タケミカヅチノミコト）、第二殿が香取神宮からの経津主命（フツヌシノミコト）、第三、四殿が大阪府枚岡（ひらおか）神社

からの天児屋根命（アメノコヤネノミコト）と比売神（ヒメノカミ）である。鹿島・香取は縄文王家の 1 つ、天児屋根命は神話上の藤原氏の祖神である。比売神は天児屋根命の妻とされるが、宇佐神宮の比売大神という説もあり、それならば、やはり縄文王家の 1 つである。そして、奈良はもう 1 つの縄文王家である紀伊・熊野の北に位置することからすれば、縄文 3 王家揃い踏みとなり、表の秦氏＝藤原氏が彼らの支援を受けているという暗示でもある。

奈良盆地のオリオン



「飛鳥の地上絵 呪いの巨人像」
(山上智、学研ムーブックス)

天空のオリオン



春日大社のある三笠山は古くから物部氏・和珥（ワニ）氏の信仰の対象だった。和珥氏の本拠地は奈良盆地の和爾（わに、現在の天理）で、その後、春日野に移住して春日氏となった。春日氏は布都努斯（ふつぬし）神社の神主だったが、そこは後に石上神宮となった。布都努斯とは香取から勧請された経津主命のことで、石上神宮では神武東征の時に高倉下が持って来た太刀＝布都御魂＝布都御魂大神が祀られる。これは、鹿島の武甕槌命が中洲を平定した時に持っていた神剣とも言われている。従って、物部氏とされてはいるが、和珥氏は縄文海人の一族と思われる。

さて、この“かすが”は当て字である。“春”は“三人（の）日”と分解でき、日は太陽を表すから、“春日＝3 人の太陽神”である。3 人の太陽神が祀られていたのは、エジプトである。日の出のアトゥム、天空のラー、日没のケプリであり、各ピラミッド（第 1、第 2、第 3）にも対応する。

・第1=アトゥム、第2=ラー、第3=ケプリ。

この3人の太陽神の真相は、すべてマルドゥクに他ならないが、この仕掛けを施したのは原始キリスト教徒の秦氏である。すなわち、一神教だが、エジプトが一時期一神教となったのはアメンホテプ4世=アクエンアテンの時代である。一神教にしたのは、実はアクエンアテンの妻の影響だという説がある。その妻はネフェルティティだが、Wikipedia等に依れば、彼女の素性は不明とされ、彼女は大神官アイの娘という説と、ミタンニ王国の王女という説がある。ミタンニでは太陽女神=イナンナ崇拝があり、当然のことながら、それは3つに分裂などしていない。エジプトでは様々な神々の像=偶像が造られたが、アクエンアテンの時代の太陽神は先端が手の形状を取る太陽光線を何本も放ち、光線の1つに生命の象徴アネクを握った太陽円盤の形で表現されたので、それまでのエジプトとは考え方が異なる。故に、ネフェルティティは大神官の娘ではなく、ミタンニ王国の王女と見なす方が妥当だろう。

太陽円盤



<http://image.search.yahoo.co.jp/search?ikf=2&ei=UTF-8&id=1&p=%E3%82%A8%E3%82%B8%E3%83%97%E3%83%BB+%E5%A4%AA%E9%99%BD%E5%B6%B6%E7%9B%A4>

太陽神ラー



<http://www.moonover.jp/bekkan/god/ra.htm>

前述のように、ヘブライの十支族系と二支族系の上に血縁関係は無い。十支族系はサマリアのシュメール系多神教なので、一神教の概念を持ち込んだのは二氏族である。この二氏族は、一神教となったアクエンアテンの時代にエジプトにおり、そこから移動して来たと考えられる。二氏族は後に原始キリスト教徒となり、渡来して様々な仕掛けを施したが、彼らの出自を暗示するため、3人の太陽神を表す春日神社でピラミッドの並びの元となったオリオンを描いたのである。(仕掛けを施したのは、実は縄文海人か?)

オリオンはギリシャ神話由来のものだが、海神ポセイドンの子とされる。ポ

セイドンはエンキで、マルドゥクはその長男だから矛盾しない。そして、エンキは縄文の最高神である。また、オリオンは力のある獵師だったが、乱暴者だったので、大地母神ガイアがサソリを使って毒針で刺し殺した。これなども、マルドゥクの横暴さを暗示していると言え、ガイアはマルドゥクに最も敵対していたイナンナであり、サソリはイナンナのシンボルでもある。

イナンナのシンボル・ロゼッタを保護するサソリ



<http://wings.buffalo.edu/english/faculty/christian/syllabi/375/hh1w1/hh1w1.htm>

さて、奈良盆地に展開するオリオンは良く見ると、左手（向かって右）に棍棒もしくは剣のようなもの、右手（向かって左）に盾あるいは毛皮を持った形状で、天空のオリオンとは左右が反対である。つまり、「合わせ鏡」になっている。これが暗示するのは、次のことである。

- ・ピラミッドの配列と「合わせ鏡」になっている外宮、内宮、伊雑宮の配列。
- ・オリオンの原型はマルドゥクだが、「合わせ鏡」で親のエンキ。

オリオンを構成する春日神社のヒメノカミは宗像三神でイナンナが原型だが、中でもイチキシマヒメはエンキの「合わせ鏡」である。すなわち、このオリオンはエンキとイナンナの重ね合わせで、前述の近畿に於ける逆さ五芒星と共に、シリウスを暗示している。

オリオンが暗示するエジプトでは、太陽活動が最盛期となる夏至頃にシリウスと太陽が同時に東の地平線から昇り、その時期はナイル川の氾濫時期と重なり、耕作にとって重要な徴である。（この地域の耕作方法は、氾濫が引いた後の肥沃な沖積土を利用して耕作する氾濫農耕である。）その周期は約 365 日で、太陽暦の基となった。太陽を一神教時代の太陽女神と見ればイナンナで、シリウスはエンキがメインだから、ここでもエンキとイナンナが重なる。この考えを奈良盆地に展開するオリオンで暗示しているならば、エンキ＝縄文、イナンナ＝弥生の上に築かれた大和朝廷という暗示でもある。

そして、エジプトのナイル川にはワニが生息しているが、奈良盆地は元々、巨大な湿地帯だったことから、“春日”の元がワニ氏というのは適切である。後にこの盆地に築かれた藤原京は北に耳成山(玄武)、東に目無川=米川(青龍)、西に上つ道(白虎)を配し、陰陽道的に南には池や湖が配されるべきだが、この付近は元々巨大な湖の底だったことから、南は池(湖、朱雀)である。従って、この地が巨大な湖を埋め立てたことの証でもある。

奈良はアラム語で“川”、ヒンズー語で“原始の海”、そしてアスカはアラム語で“ハスカ”で“高貴な方の住居”を意味するという。また、「超大陸パンゲア文明「アスカ」の謎」(飛鳥昭雄、学研ムーブックス)に依れば、飛鳥氏が聞いた八咫鳥秘記には“人類の2人の始祖は単一大地の東に住み、安宿(あすか)と定め、寧楽(なら)とも称し、アスカは安らかな地、奈良も同意でかつ「成」「也」でもあり、「アスカナリ」となる”らしい。単一大地は古代パンゲア大陸を意味するが、その時代から人類が居たかどうかは疑わしいものの、アスカが“安らかな地”という意味の可能性はある。しかし、世界中に“アスカ”に関わる“ナスカ”などの地名があることからすると、人類の始祖にあやかる地名が分散したというよりも、神権を授けられた王が世界中に居たことからすれば、“ハスカ=高貴な方の住居”説の方が妥当だろう。

いずれにしても、藤原京は“ふじわらきょう”ではなく、理想郷とされた“とうげんきょう”なのである。耳成山にはクチナシの花が生い茂るが、この“口無し”と“耳無し”山、“目無”川、で“言わざる”“聞かざる”“見ざる”となる。書物や伝承は何も語らず(言わざる)、民は何も伝えられず(聞かざる)、簡単には本質が見えない(見ざる)。それは、この地に隠されたこのような秘密のことに他ならない。

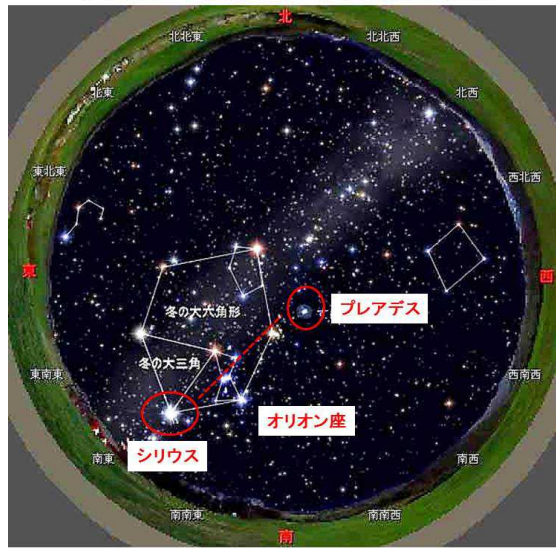
③シリウスとプレアデス

天空でオリオンを中心に見ると、シリウスとプレアデスが対照的な位置にある。すなわち「合わせ鏡」であり、オリオン自体が鏡となっている。

西洋のスピリチュアル系では、プレアデスに関わる逸話がいろいろあるが、これらは実は「合わせ鏡」でシリウスのことを暗示しており、シリウスのカモフラージュとなっている。

そして、オリオン自体が鏡とされたのは、ここまでの流れからすると、「かみ」の中から「が=我=エゴ」を取り去ってこそ太陽の真相(シリウス)が見えて来るといふ、眞名井の眞理=宇宙の眞理を暗示しているとも言えよう。鏡が太陽神的天照大神の分身とされているのは、こういうことなのである。

シリウスーオリオンープレアデスの位置関係



<http://www.geocities.jp/kanotuno/mini/fuyu.htm>

(8) シリウスと天御中主神

ここまでの考察で、シリウスこそが本来の太陽で極めて重要であること、そして、様々な極秘伝を伝承する籠神社もシリウスに関わっていることが判明した。そこで、もう一度、籠神社の極秘伝を振り返る。

籠神社の極秘伝では、“豊受大神 亦名 天御中主神 亦名 天照大神”とある。そして、豊受大神＝天照大神荒御魂＝瀬織津姫＝シリウスで、“水気根源” “生命の根源”の根源神・国常立尊でもある。ならば、シリウスを宇宙根源＝天御中主神と見なしているとも言えるが、これは果たして妥当なのか？

また、神宮では“太一”が神宮を象徴する文字とされているが、太一は本来、北極星を意味する道教由来の言葉である。そして、諏訪大社の本宮と前宮の間にある北斗神社では天御中主神を北極星として祀っている。確かに、これならば北極星＝天御中主神＝太一＝天照大神となり、籠神社の極秘伝と一致するが、この意味するところは何なのか？

シリウス B は白色矮星で、1 立方センチ当たり 1 トンという極めて重い金属性物質で構成されているので、ブラックホールや中性子星とまではいかなくとも、その周囲の時空は相対性理論によってかなり歪んでいるはずである。巨大な質量により発生する時空の歪みは重力波で観測されるが、実際、白色矮星の連星系の振動で発生する重力波が観測されていることから、シリウス B の周囲の時空も歪んでいるはずである。

ここからは想像になるが、時空の歪によりいわゆる“アカシック・レコード（元初から未来に至るすべての事象、想念、感情が記録されているという宇宙の図書館）”にアクセスできる状態が発生するならば、それは1つの根源神的なもの＝天御中主神と言える。ドゴン族の伝承で、シリウス B を宇宙に於けるあらゆる創造の出発点として宇宙の中心に置いていることは、そのようなことを暗示しているのかもしれない。

また、北極星は天に於ける不動の星だが、それは地球の地軸がそちらの方向を向いているからに他ならない。だから、地球は北極星の支配を受け、それをもって北極星が根源神と見なされてもおかしくはない。（実際には歳差運動により、26,000年周期で移動する。）

シリウスは夜の天空に最も明るく輝く。ならば、実は太陽系というのは広く見ればシリウス系なのであろう。宇宙の大きな泡構造からすると、恒星系は暗黒プラズマで連結されていると考えられ、従って、近い恒星同士はエネルギー的に強い相互作用があつて然るべきである。そのようなシリウスに、不動の星である北極星が象徴として重ねられたのである。

また、籠神社の絵馬には、六芒星に囲まれた太陽と月が描かれており、彦火明命とイチキシマヒメが籠船に乗っている。

籠神社の絵馬にある六芒星



籠神社としては、太陽は天照大神、月は豊受大神を示しているから、両者が一緒になっていることは、“豊受大神 亦名 天御中主神 亦名 天照大神”で実は天御中主神であり、それはシリウスの暗示である。そして、六芒星は“籠”

神社の“籠目”であり、籠神社の隠し歌が“かごめ歌”である。ならば、かごめ歌にある“籠の中の鳥”とはまさしく絵馬に描かれている六芒星に囲まれた太陽と月のことで、それは天御中主神＝シリウスであり、“いついつ出やる”とは、封印されたシリウス系の真相がいつ明らかにされるのか、という暗示である。

また、彦火明命とイチキシマヒメが“籠”船に乗っているが、彦火明命＝火＝“か”、イチキシマヒメ＝水神＝水＝“み”で、両者が一体となって“かみ＝神”であり、これもまた“籠”の中に乗った根源神ということである。

(9)まとめ

長くなったのでまとめる。

- ・太陽系はシリウス系の一部である。
- ・太陽＝天照大神は影のできる光で、影のできない真の太陽は宇宙創造のエネルギーに通じるシリウス＝豊受大神＝国常立＝天御中主神であり、太陽とシリウスは「合わせ鏡」の関係にある。
- ・太陽のシンボルは六芒星、シリウスのシンボルは（逆さ）五芒星である。
- ・アヌンナキの星ニビルはシリウスと太陽を結ぶ橋渡し役で、ニビルはシリウスをも暗示する。
- ・シリウスには、カバラ的にエンキをメインとしてイナンナが重ねられており、それが瀬織津姫であり、菊理姫であり、弁天様＝イチキシマヒメであり、豊受大神である。特にエンキは、ツキヨミなどとして隠されている。
- ・縄文海人はエンキを最高神とし、弥生海人はイナンナを最高神とした。
- ・籠神社にはシリウスの真相も隠されている。
- ・オリオンには、シリウスの真相を暗示する「合わせ鏡」などの意味がある。

*主な参照：<http://iyasaka369.blog.fc2.com/>